

固有名詞の^{よみがえ}り^りと談話構造モデル

春日 博[†] 仁科 弘之[‡] 三島 健稔^{†‡}

[†]埼玉大学大学院理工学研究科

kasuga@me.ics.saitama-u.ac.jp

[‡]埼玉大学教養学部

nishina@ceres.me.ics.saitama-u.ac.jp

^{†‡}埼玉大学工学部

mishima@ics.saitama-u.ac.jp

1 はじめに

文法を対象にした生成文法の枠組みにおいて、同一文内で、固有名詞と同一指示的な代名詞は単位節の外側と内側では許容される。しかし同一節内では許容されないことが束縛原理(binding principle)の原理 B によって規定されている[1]。

- (1) a. John_(i) believes_{[CP that he_(i) is a genius].}
- b. *John_(i) likes him_(i).

さらに同原理 C において、固有名詞は、文中でそれを C 統御する同一指示的な代名詞をもてないと規定されている。

- (2) a. He_(i) likes John_(j).
- b. *John_(i) likes John_(i).

一方、談話においては、同一指示的な代名詞の使用のほか、固有名詞を再び用いる例が散見される。

- (3) a. John_(i) likes his parents. But he_(i) doesn't like his children.
- b. John_(i) likes his parents. But John_(i) doesn't like his children.

束縛原理 C はその定義上、例文(3b)のタイプを確かに許容している。というのも(3b)の後半文のなかに、John を C 統御(c-command)する表現が見あたらないからである。

- (4) 束縛原理 C [解説的略述]: R 表現 (固有名

詞も含まれる) は、それを含む全体木構造内において、それを C 統御する表現と同一指示的であってはならない。

それでは談話で同じ実在(entity)を再び示したい場合、同一指示の代名詞を用いるか、あるいは同じ固有名詞を再度用いるかは無作為に決められているのだろうか。後者の現象を「固有名詞の甦り」とよぶことにして、この現象の談話における含意を検証する。

2 束縛原理の含意

前節でみたように、束縛理論を談話に応用可能であると仮定すると、その含意はどのようなものになるだろうか。まず明らかなのは、承前関係が複数文(ここでは、文とは埋め込み文のことでなく、“.”、“!”、“?”等で区分された、音声学的に独立した単位)に及ぶので、束縛関係の基礎をなす C 統御は成立しない点である。さらに、逆行代名詞化は同一文内に代名詞に後続する先行詞がある現象であり、対応する現象が談話にも存在するが、ここでは立ち入らないことにする。

束縛理論に従えば、先行詞が変わらない限りその後には前者と同一指示的な代名詞が続く、つまり同一指示を表す限り代名詞で承ることが可能ではある。しかし、(3b)のようにピリオドを越えると、固有名詞の「甦り」も可能になる。また甦った固有名詞は、同じ字面でありながら最初の固有名詞と異なる側面を持つ。

本来、固有名詞は先行詞を持たない、つまり参

照を行わない。したがって仮に甦った固有名詞も参照を行わないとすると、そこから新しい談話構造が始まるはずである。談話における同一指示問題は束縛原理Cの適用範囲外への許容であるので、以下の作業仮説を採用してみる。

- (5) 仮説:「固有名詞とそれに同一指示的な代名詞を含む談話単位と、甦った固有名詞とそれに同一指示的な代名詞を含む談話単位の間には、談話上の役割に何らかの差異がある。」

検証方法

- (i) 甦る固有名詞をさがし、マークする。束縛理論に従うと、先行詞が変わらない限り、その後前者と同一指示的な代名詞が続く。同一指示を表す限り代名詞で承けるはずだから、その後の固有名詞が「甦り」である。ただし甦った固有名詞はすべて適切な甦りではなく、曖昧性を解消するため等の特別の事情で代名詞表現が使えない場合がある。これらは例外扱いとする。
- (ii) 話のまとまりで区切りを示す {} を人手で入れる。これは埋め込み文を最小単位とするが、基本的には、“.”, “!”, “?”などで区切られた音声的な区分を単位とする。したがって意味的なまとまりが基本になっている。

3 British National Corpus を用いた例文検索

本研究では、同一指示表現の実際の使用を検証する手段として、収録語数が多く例文の均一性が比較的確保されている British National Corpus (以下 BNC)を用いる。また本稿で検証する固有名詞の対象は人名とする。BNC では「人名」に相当するタグがないため[2]、まず例文中に出現する固有名詞の頻度を計測した。頻度が上位の固有名詞(人名)は以下のような結果になった。

表 1 BNC の固有名詞 (人名) 頻度

固有名詞	頻度
John	32,266
David	15,052
Peter	11,997
Paul	11,242
George	10,765

つぎに最も頻度が高い固有名詞である John が出現した後、再度 John が出現する場合と he が出現する場合の共起頻度を計測した。

表 2 John の後に John が再度出現する数

word 間	出現数	word 間	出現数
0	23	6	127
1	80	7	135
2	172	8	121
3	112	9	106
4	106	10	129
5	138		

表 3 John の後に he が出現する数

word 間	出現数	word 間	出現数
0	17	6	314
1	145	7	305
2	392	8	290
3	273	9	312
4	309	10	340
5	308		

ただしコーパスを用いた検索では、最初の“John”と次の“John”が同一人物を指示していない可能性がある。また同様に“John”と“he”が同一人物を指示していない可能性もある。

検索結果の中から同一指示である例文を抽出するには、人手による検証作業が必要となる。ここでは検証後の例文をもとに、考察をすすめる。

4 固有名詞の「甦り」と談話単位

検証後の検索結果を見ると、談話で同一指示の固有名詞、つまり甦りが用いられるのは複数の先行詞選択が可能になる場合である。例えば2人以上の人物が登場するような場面では、最初にそれぞれの実在を固有名詞で指示すると、複数の先行詞が生まれる。

ここでは固有名詞の甦りが、談話の一定の構成要素とほぼ対応していることを確かめる。まず、まとまりのある文章を対象として、固有名詞の甦りを、以下のような手続きによって探索する。

- (6) (i) それぞれの初出の固有名詞に着色す

- る。
- (ii) (i)の固有名詞と同一指示的な代名詞に同色で着色する。
 - (iii) 固有名詞の後に同一指示の固有名詞が表れるとそれを「甦り」と見なし、文字に網かけをする。承前（束縛）関係は文境界を越えることが可能。甦りの固有名詞のなかでも、
 - a. 直前の固有名詞（あるいは代名詞）と指示が異なり，よって先行二表現のあいだで指示が曖昧になるものは一重の丸括弧（…）で囲む。
 - b. 直前の固有名詞と同一指示的だが，さらにその前の固有名詞とは同一指示的でなく，先行二表現のあいだで指示が曖昧なもの（…）で囲む。

次に、(6)とは独立的に、人手によりその文章を時空間（談話空間）の一貫性に基づき、統語的に区分する。

- (7) ピリオド単位の文，あるいは文接続の **and**, **but**, **for** の等位接続詞で始まる文，非制限節を単位と見なし，談話空間の一貫性に基づいて区分する。

両者の結果を比較すると，(6)により探索された固有名詞の甦りが，談話単位とかなりの程度まで対応することがわかる。以下で具体例を見る。

5 甦りに基づく談話単位の決定

前節で述べた手法により，BNC から取り出した意味のまとまりある文章例をあげる。

- (8) {1 One of the biggest bullies at the time was the king, **Herod1**. He didn't care how he got his own way as long as his own way was what he got.} {2 There are three important things to learn about bullies from the Bible's description of **Herod2**.} {3 In Mark 6 verses 14-29 you can read the tragic story of **Herod3** ordering the execution of Jesus' cousin, (**John1**) the Baptist.} {4 (**Herod4**) had arrested (**John2**) because ((**John3**)) kept reminding (**Herod5**) of how wrong he had been to marry (**Herodias1**), who was already married to (**Herod6**) 's brother **Philip**.} {5 Now you may have noticed that bullies don't like having their faults

pointed out to them,} {6 and so (**Herod7**) had (**John4**) locked up in prison. However, (**Herod8**) did not want to kill (**John5**),} {7 because, the Bible tells us, 'He*(=Herod 著者注記) was afraid of (**John6**) because he* knew that (**John7**) was a good and holy man.}' {8 (**Herod9**) could not help but respect (**John8**), even as he picked on him.}

Lawrence, David. 1992 *The chocolate teapot*, Scripture Union

例文中の固有名詞と代名詞に(6 i),(6 ii)によって着色した。さらに(6 iii a),(6 iii b)によって丸括弧（…），二重丸括弧（…）を付与した。スペースの都合上，同一の文章中に談話単位{}の区切りも重ねて含めてあるが，談話単位は甦る固有名詞関連の他の記号とは（人手による）別の基準で決定した。談話単位毎の要約は以下のようになる。

- (9) {1}: 暴君の代表はヘロデである，
- {2}: 聖書から暴君ヘロデについての教訓が学べるという主張，
- {3}: マルコ伝には（イエスの弟を処刑した）ヘロデの逸話があると言う指摘，
- {4}: （ヨハネは，ヘロデがヘロディアスと結婚していたのを責めたから捕らえたという）マルコ伝の逸話（1），
- {5}: （暴君は己の過ちを指摘されたくないという教訓についての）語り手の解説（1），
- {6}: （しかし，ヘロデ自身はヨハネを拘留したが殺したくなかったという）マルコ伝の逸話（1），
- {7}: （ヘロデは善行を積んだ信者のヨハネを恐れていたという）語り手の引用による解説（2），
- {8}: （ヘロデはヨハネを苛んだが，敬意の念を禁じ得なかったという）マルコ伝の逸話（3）

この文章には著者の主張を行うための導入部，その例証のためのマルコ伝からの引用，自己の主張の正しさを引用によって説明する部分が含まれ，その引用と説明が交互に現れる。これらの部分をそれぞれ，前述の(7)にしたがってまとめるためには，あらかじめより小さな談話単位に分解しておかなければならない。(8)の文章は，(9)で示した8つの談話単位からなる。なお，引用部と

説明部は解釈の曖昧性を残す。例えば談話単位{7}は{8}に含まれる、つまり{7}は解説ではなく、引用部であるとの解釈もできる。

ここでピリオド単位の文、あるいは文接続の *and*, *but*, *for* の等位接続詞で始まる文、非制限節を【】であらわし、必要なときはその埋め込み文をさらに[]であらわし、上記の文章の固有名詞 *J* (*ohn*) の魅りを再表記してみる。

- (10) [1... H1...], [he... he...],
 [2... H2] ,
 [3... H3... J...],
 [4 (H4)... J
 [... J... (H5)... [... he... HER...
 [... (H6)... P...]]]],
 [5...],
 [[6 ... (H7)... J...] [... (H8)... J]] ,
 [7 ... he*... J [... he*... [... J...]]] ,
 [8 (H9)... J ... he ... him] ,

さらに、同じ文章に別基準で区分した談話単位を{ }で付してみる。

- (11){1 [1... H1...], [he... he...] } ,
 {2 [2... H2] } ,
 {3 [3... H3... J...] } ,
 {4 [4 (H4)... J
 [... J... (H5)... [... he... HER...
 [... (H6)... P...]]]] } ,
 {5 [5...] } ,
 {6 [[6 ... (H7)... J...] [... (H8)... J]] } ,
 {7 [7 ... he*... J
 [... he*... [... J...]]] } ,
 {8 [8 (H9)... J ... he ... him] } ,

ここから興味深いことがわかる。すなわち、いずれの談話単位においても、例外を除けば必ず一つ以上の魅りの固有名詞が現れている。例外の談話単位は{5}と{7}であるが、{5}ではヘロデへの言及がない。{7}は聖書の直接的引用により代名詞のみが現れている。単位{4}と単位{6}においては、固有名詞が複数回魅っている。ただし単位{4}はH5はH4との間にふたつの *John* が介在するため、代名詞使用による曖昧性を回避した結果としての魅りである ((6 iii a)を参照)。単位{6}も同様

の理由からの魅りであり、この場合は介在する固有名詞は1つである。なお、固有名詞 *John* の魅りについて同様の分析をおこなうと、談話単位4において(6 iii b)の事例が現れるが、他の部分は同様であり、上記の一般化に抵触しない。

6 結論

束縛原理Cの適用範囲外である談話において、固有名詞が魅ることをコーパスによって検証した。さらに、談話内容が重層的な世界で構成されており、それらを断片的に交互に語る時、その単位を談話単位とよぶと、関連する談話単位には必ず魅りの固有名詞が含まれる可能性があることを例証した。

7 今後の課題

今回は既存の意味モデルに依拠しなかったが、本研究で提案された談話構造モデルの、談話表示理論やセンタリングモデルとの関係を考察する予定である。さらに、概念的な問いも発生する。BNCでも同一指示の代名詞が繰り返す例文を見出せるが、同一指示の代名詞が談話内で延々と繰り返し出現することはない。代名詞を用いるほうが効率的であることが明白であるのに、何故、自然な文章においては魅りがおこるのだろうか。言い換えると、ヒトは何故、談話で表す世界をわざわざ魅りを必要とするように分解し、それらを交互に配するような構成を好むのか。この問いは認知的に極めて重要であるように思われる。

参考文献

- [1] Chomsky, Noam. 1980 *On Binding, Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
 [2] Aston, Guy and Burnard, Lou. 北村裕訳, 2004, *The BNC Handbook* コーパス言語学への誘い, 松柏社
 [3] Haegeman, Liliane. 1991 *Introduction to government and binding theory*, Blackwell